



# 都市デザイン

まちを楽しくする工夫の数々

横浜市都市デザイン室

URBAN  
DESIGN  
YOKOHAMA

都市デザインってなに?都市はまちのこと。ではデザインは……。実はデザインを日本語にするのはとても難しい。辞書には、ものをつくるときに形や素材、色などを決めること、広くはそのための計画のこととあります。つまり都市デザインとは、まちを良くするための計画を考えて、最後は形にするところまで様々に「工夫」することと言えそうです。

まちは建物や道路、公園、鉄道などいろいろなもので出来ていて、それをつくる人もいろいろです。さらにはその中で仕事をしたり、買物をしたり、休憩したり、観光に訪れたり、まちを使う人たちもさまざま。横浜の都市デザインは、個別のものごとや人たち、活動を結びあわせて「魅力と個性のある人間的なまちをつくること」を理念としています。

横浜のまちの様々な工夫のかさなりをこのリーフレットで紹介しました。横浜の魅力をもっと知りたくなったら、ぜひ実際のまちを歩いてみてください。

# オープンカフェ

公共のスペースをオープンに

## Open-air Cafe

明治の頃の日本大通りは通りを超えて火事が燃え広がらないようにと、幅を広くつくってありましたが、自動車が多くなるにつれただ車道が大きく取られ、車が主役の通りになっていました。そこで、車道を狭めて、その分、歩道は倍の幅に広げ、歩きやすく美しく周辺のまち並みに調和した通りにつくりかえています。

さらにただ歩道を広げるだけではなく、沿道のお店がオープンカフェを出せるような仕組みもつくりました。当たり前なことにも聞こえますが、実は日本の法律では道路を通行以外に使うことが、とても難しいのです。

オープンカフェを出すことで、日本大通りは歩くのが快適だけでなく、雰囲気を楽しむことの出来るゆったりとした通りに生まれ変わりました。

道路や公園には潜在的な魅力を持つところも少なくありません。「公共のスペースをオープン」にすることで、その魅力をきちんと活かしていくことも都市デザインの大事な役割です。



# プロムナード

歩行者がまちの主役

Promenade



横浜の都心部、特に関内には歴史的な建物や開港当時の町割りが今も多く残されています。例えば日本大通りは、日本人街と外国人街の境界線。歩いてみれば、今も居留地の歴史や雰囲気を感じられます。

そんな横浜では、近代となって車が増えても「歩行者がまちの主役」でいられるよう、様々な工夫をしてきました。そのひとつは、桜木町・関内・石川町の各駅から山下公園までの道しるべとして、船や赤い靴の描かれたタイルを路面にはめ込むこと。はじめて来た人でもこの絵タイルをたどっていくと、楽しく歩きながら日本大通りや横浜らしい港の風景に出会えます。

海沿いにも港の風景を楽しめるプロムナードをつくっています。赤レンガ倉庫や大さん橋、山下公園に港の見える丘公園といった横浜らしい場所をめぐるルートが、歩行者専用となっているのがミソ。かつての鉄道を歩けるよう改修した自動車道のように、昔からあるものを大切に使うことも「横浜らしさ」につながっています。



## Red Brick Warehouse

# 赤レンガ倉庫

まちの記憶を今に生かす

開港したころの日本の主な輸出品は絹。赤レンガ倉庫も絹を集めて保管する倉庫としてつくられました。今でこそ多くの人でにぎわう赤レンガ倉庫も、整備前は落書きだらけで、価値があると思う人は少数派に過ぎませんでした。

横浜では他にも多くの歴史ある建物や橋、ドックなどを積極的に残して、今も使っています。開港により花開いた横浜の歴史は、京都や鎌倉のような長い年月の蓄積がある訳ではありません。それでもまちを歩けば横浜らしい歴史が感じられるのは、所有者の方々が歴史ある建物は横浜にとって大切なんだ、と使いながら残してくれているからに他なりません。

これらの建物は昔のまちの様子や文化を伝える「まちの記憶」。いわば、横浜らしさそのもの。一度壊したら二度と戻らない「まちの記憶」を今に生かして、大切に残す工夫をこれからも続けていきます。





# ベイブリッジ

港・横浜のシンボルをつくる

## Baybridge



その昔、横浜港に来た船乗りたちが、海から見える3つの塔にキング・クイーン・ジャックとあだ名をつけました。この三塔を見れば「ああ、横浜に来たな」と感じられる横浜港のシンボルだったからです。三塔＝県庁・税関・開港記念会館はその後、昔ほどには目立たなくなっていますが、今も大切にされています。

現代の「港・横浜のシンボル」は横浜ベイブリッジ。当初はトンネルで、という計画もありましたが、横浜港のゲートとなるよう、すっきりと美しい橋を架けることにしました。真っ白なのは遠くからも目立つように。夜はブルーにライトアップ。

ベイブリッジは見た目が美しいだけでなく、横浜港のトラックが都心部を通らなくてもすむバイパスとしてつくられています。機能として必要なものを「美しくつくる」ことで、誰もが知っている横浜のシンボルに仕立てる。これも都市デザインの工夫の1つです。



# スカイライン

まちを丸ごとデザイン

みなとみらいのまちは2つの都心＝横浜駅と関内の間をつないで、ひとつの大きな都心とするために新しくつくったまちです。一からまちをつくるのはとても大変ですが、だからこそできる工夫というものもたくさんあります。

その工夫の1つが美しいスカイライン。スカイラインとは建物「群」が描く空との境界線。みなとみらいではあらかじめ建物が海に向かうにつれて低くなるようなルールにしています。良い建物が集まってもいるのに、全体はちぐはぐに見えることもあるので、海や自動車道から全体が見渡せるみなとみらいでは、「まちを丸ごとデザイン」することがとても効果的で重要なのです。

海に向かって下がっていくスカイラインは、どの建物からでも海が見られる工夫でもあります。集合写真を撮る時に前の人がしゃがむのと似ているでしょうか。みなとみらいは海の近さが売りですので、この工夫はみなとみらい全体の価値を高めることでもあるのです。



Skyline



## Night view

# 夜景

夜のまちを楽しく

横浜では昼だけでなく「夜のまちを楽しく」する工夫として、歴史ある建物やベイブリッジのライトアップなど、夜景の演出も積極的に行なっています。今では様々なまちで行われているライトアップも、まちぐるみで行なったのは横浜が初めて。三塔をはじめ12の建物をライトアップした最初のイベントでは、4日間で10万人を超える人出がありました。

夜景の演出は、歴史ある建物を残していく活動とちょうど同じ頃からの取組みで、これら横浜の歴史の証人たちに、文字通り「光を当てる」ところから始まりました。ライトアップは、下から照らすことで建物の陰影を強調し、非日常的で幻想的な風景をつくり出す効果があります。

夜景の演出はその後、みなとみらいではスカイラインの強調に、ベイブリッジや象の鼻パークでは時間で色が変化する演出へと様々な発展していき、昼とはまた違う「夜の表情」をつくっています。



